

横光利一と結核

結核的日常と近代人の不安

YOKOMITSU RIICHI AND TUBERCULOSIS

張 建 明*

Tuberculosis is a unique disease which in literature provides the basis for a variety of metaphors. From Taisho to early Showa, it was commonly described as a phenomenon of the times. For many years, Yokomitsu Riichi loved a girl who suffered from tuberculosis and when her condition became terminal and she was confined to her bed shortly following their marriage, he took care of her each day until her death. Thereafter, beginning with *Haru wa basha ni notte* (“Spring riding in carriage”), Yokomitsu produced a series of works recalling his experience. However, the theme of tuberculosis itself has not been examined in previous research.

The term “cage theory” used by Yokomitsu denotes the unique predicament of the tuberculosis sufferer, a predicament which the hero of “Spring riding in a carriage” finally comes to understand. In that story, however, the hero attempts to become “invisible” and devotes himself to nursing his sick wife, mainly because to do so gives him a deep sense of

*ZHANG Jinaming 北京大学東北言語文学学部日本語科卒。上海外国語学院助手。広島大学社会科学部国際社会論修士課程を経て、現在同研究科博士後期課程在学中。日本近代文学専攻。主な研究テーマは新感覚派文学研究。修士論文は「漱石の笑い試論」。

satisfaction. Consequently, his wife's "theory" is largely ignored and the hero maintains a kind of dominance over her.

In contrast, in *Keisan shita Onna* ("A Calculating Woman"), although the hero tries his best to refute the female sufferer, conversely she seems to gain energy from this.

初めに

横光利一は、自ら結核に罹ったことはないが、長く恋をしさまざまな困難の中同棲した妻が結核で死んだので、結核患者の発病前後の生活とその死を見守った上、看病という行為によって結核と関わっていたのである。結核患者を登場させる彼の一連の作品はそういった実体験を髣髴するものである。この意味で、横光利一と結核との関わりを考える場合、彼の実体験を無視する事は出来ないようだ。

一連の作品は、1925年から1927年、つまり横光利一の妻が発病してから死後一年以内の時期に書かれたものである。時間の順で次のようである。

- a 『妻』（『文芸春秋』大正14年10月）
- b 『春は馬車に乗って』（『女性』大正15年8月1日）
- c 『蛾はどこにでもいる』（『文芸春秋』大正15年10月）
- d 『計算した女』（『新潮』昭和2年1月）
- e 『美しい家』（『東京日々新聞』昭和2年2月）
- f 『花園の思想』（『改造』昭和2年2月）^①

a、b、e、fには妻が登場するが、c、dは亡妻のことに触れたものである。今までの研究では、「一連」と称しながらも大抵『春は馬車に乗って』と『花園の思想』との両作品に注目する傾向があるようだ。両作品と比べて外の作品の完成度が余り高くない^②ということは理由の一つに挙げられるかもしれない。発表当時から、一連の作品は横光利一の愛情のあらわれだという取り方が目立ってきたが、近年来一連の作品に関する新しい研究が見られる。たとえ

ば、栗坪直樹と山崎国紀の両氏の研究である。『横光利一の虚構と体験——妻の死をめぐる諸作其他——』^③はこの一連の作品を男の内面劇と位置づけ精彩を放つ論を展開している。また、『燃烧と美化——「病妻小説」論』^④は「冷たい献身」という言葉を以て作品の夫婦関係に今まで違った見解を示した点で言えば鋭いと思う。

ただ前者の場合、『春は馬車に乗って』の中の妻のことを「放縦性」という言葉で形容しているように著者は作中の男よりの立場を持っている。表面から見れば妻のことを「放縦」と考えることはもっともだが、ただこうすると男の「人並み」ではない「詠嘆」も「哀惜」もそして「客観主義」も妻の放縦性に対するものように見られるおそれがある。それに妻のことは本当に「放縦性」だけなのだろうか、またなぜ妻は放縦するのかという疑問が残る。後者の場合、これも妻の病気の特徴について触れてない。つまり夫はなぜ妻を愛していると言いながら「冷たい」関係になった理由を明かしていない。妻はどうしてそうなるのか、また夫婦の間に食い違いはどのようにして生じるのかという問題に立ち入っていない。これらの研究は一つの読みとして立派に成立するが、もし、結核という視点を取り入れるとやや違った読みが成立するかもしれないと思われる。

病んで死ぬという意味で結核もほかの不治の病と同じだが、ただ結核という病気は、病因不明と完治の不可能などの理由で生きていながらも死が確実のものとされている病気であり、精神病ではないのだが精神病と親和的である^⑤。こういった点から言えば大変特殊な病気であると言わなければならない。従って結核が文学に取り入れられるときもその特殊性が絡んでくることは十分あり得るし、また結核の文学的ロマン化と、結核を病む作家の心境の作品化にも実際は結核の特殊性が絡んでいるのである。ただ、横光利一の一連の作品は、看病の体験と彼なりの文学姿勢のためやや異質なもののようである^⑥。結核に触れる作品は以上挙げた以外にもあるが、ここでは妻と関わりのあるものに絞って考えてみたい。

— 事実関係を求めて — 結核少女と横光の不安 —

横光利一が結核に触れた作品を数多く書いたのは、君子という結核に患い、結核で死んだ恋人の存在とは無関係ではない。まず実生活の中で、結核とそれを病む恋人を横光利一はどう感じているのかということ、「書翰」^⑦を通じて見てみたい。

Tamaoさんは心身共に健全か。君ちゃんからこんなことを云って来た。「私此の頃どうしたんでしょうね、道を歩いている時でも黙って、袂を口へあてるのよ。」と。そして、俺は下らぬ物を書こうとして、その準備に、飯を三度も一日に食べては胃を悪くし続けている。(大正9年8月1日 佐藤一英宛)

君子のこういった「自覚症状」は結核の兆しと疑われても仕方がない症状であると言える。「書翰」によれば、君子が発病したのは大正14年の6月ごろであり、死んだのは昭和2年6月24日である。また大正13年12月川端康成宛の手紙に「これ又二人とも臥床。崇られ候か」と書いているところから見れば、君子は前から病弱だったということが分かる。結核とは感染されてから発病するまでの期間が相当長い病気である。これは、50年代の医学界においてすでに共通した認識となっている。つまり、発病は結核が明確に診断されたということであり、感染は寧ろだいぶ前からのことである。そして「熱が出、咳が出ても、風邪かなにかで直ぐ回復するだろうと当時の人々が信じていた。結局、患者が血を吐くまでは、医者はなかなか呼ばれなかった。」さらに、当時の人々は「肺病という病名を隠蔽することは患者が自分自身を差別されることから守ることであった。」^⑧従って、君子の病弱さは結核感染による可能性を排除することができないようである。

自覚症状、病弱、発病と結核で死んだこと、さらに、結核という病気の特徴と当時の事情から見れば、君子が結核に感染されたのは発病のだいぶ前であることが言えると思う。無論、横光利一はこれについて気付いた。だが、彼がこ

のため君子から離れようとする事はなかった。

そして、

病人現金にて、ここへ来れば馬鹿馬鹿しき程良好にて、どこが悪いのか
医者でも分からず、といった形。(大正14年10月24日中河与一宛)

家内は海のものか山のものか、どうも医者と云うものは、いつでも一年
間位嘘のつき通しだ。(中略) 先日から烈風が吹きつづけるが、戸も何も
かも開け放し、それでも、いつもよりずっと病人のせきも少く熱も少い、
おかしなものなり。(大正15年4月川端康成宛)

とある。以上から、横光利一が結核の気まぐれさに悩まされていることがわかる。結核という病気はなぜ悪化するか、あるいはどういった理由で小康状態になるか、そのわけがはっきりしないものである。彼は結核という病気に戸惑いを感じたのだ。それに、頼りになるはずの医者が「嘘の突き通し」をしていると書いている。これを考えると、結核に対してどうすればいいかに困り果てて途方に暮れている横光利一の表情が目に見えかぶような気がする。

君子との恋愛に関して次のようなものがみられる。

明日は土曜日なので、君ちゃんを見に行ける。可愛い子だよ。君ちゃんのことを思うと不思議に情欲なんて何處かへ飛んで了う。妙なものだ。俺を大切にしてくれ。(大正9年5月22日佐藤一英宛)

昨日は、君ちゃんの家へ行って来た。あの子うまい。旨いというと、賢いと云う意味に少し技巧の方も入る。それが仲々うまいのだ。あっぱれ小生をも手玉にとりそうな形勢が見える。喜んでいいのか遺憾と云っているのか凡眼では見えかねる。(大正9年5月24日佐藤一英宛)

以上から見れば、どういった魅力かを別にして、横光利一は君子に対して大変な魅力を感じていることは間違いない。だが「妙なものだ」「喜んでいいのか遺憾と云っているのか凡眼では見えかねる」といった表現から、君子に対して横光利一は大変な魅力を感じながらも何らかの戸惑いを感じずに入られないことが伺える。これはまた普通のいう「恋は異なるもの味なもの」とは別の戸惑

いようだ。

以上を以て、次のことが言えるようだ。まず、君子は発病のずっと前に結核に感染されていた可能性がある。正確にいつ感染されたか不明だが、大正9年頃にすでに感染されていた可能性を排除できない。そうすれば横光利一の恋人は結核に感染された少女であると言える。医学界において結核と精神心理との関係が確認されている。それは、個人個人の状況によって大変差があるが、結核が精神心理に影響するばかりではなく、精神心理もまた病状の変化に大いに影響しているという関係である⁹。これは二人の恋と生活、また一連の作品に何らかの影響を及ぼしていることが十分考えられると思う。

実際、横光利一と君子との恋は二人が終始愛し合っているながらも「妙にこじれた」ものである。それは、日沼倫太郎の指摘した「姦通に類似の心的体験」の生んだ一種の悲劇であると井上氏が言っている¹⁰。ただ、結核と精神心理の相互影響の関係から、また結核少女君子と結核そのものに対して横光利一が常にある種の戸惑いを抱いていることから言えば、二人の恋が妙にこじれたことから結核の落とした陰影を払拭できないように思われる。

そして、結核、またその患者の取り扱いに横光利一が大変困っている。医者さえ頼りにならないという感嘆をもらすところに人間の頼りなさに対する横光利一の抱いている不安が覗かれる。

次はこれを踏まえた上で、作品について考えたい。なお、粗筋の述べ方は作品の読みによって幾通りかのものであり得ると思う。これから述べることはやや結核に傾く形の読みに基づくものであることを断っておきたい。

二 『春は馬車に乗って』と『花園の思想』——結核的な生と死——

結核という視点から見れば、この二つの作品は結核を病む妻の精神状態を描いたところに共通している。違うのは、前者は結核患者の生の、日常の精神状態であり、後者は臨死の精神状態であるということである。

結核患者の精神状態が詳しく描かれているという意味で、『春は馬車に乗っ

て』という作品は一連の作品の中で最も重要なものである。ここでは、妻の精神状態とそれに対する看病の夫の対応を中心にしていってみたい。

妻の精神状態は、「檻の中の理論」という作中の夫の言葉で概括する事が出来る。「檻の中の理論」とは、まず「意外な欲望」といったものである。たとえば、回復したら洗濯したいという願望である。ただ「意外な欲望」とはあくまでも健康な夫の立場から見たものである。妻にとってこの欲望は元気な時が懐かしいという気持ちのあらわれに過ぎない。そして、極端な自己中心である。たとえば、夫が生活のために別室で仕事をしなければならないが、妻は一刻でも自分の側から夫が離れると夫を責める。夫が疲れているとき「どうしてそう面倒臭がりになったのでしょうか。もとはそうじゃなかったわ」、「何も文句を言わずに、看病がして貰いたい」というふうに妻は無条件で完全な奉仕を求める。結核を病む妻の精神状態のもっとも大きな特徴は神経が異常なほど鋭いということである。常に夫の「額に煙り出す片影のような皺さえも、敏感に見逃さない」というような具合で夫の心理を鋭く察する。

だが、作品は、妻を描くよりもむしろ妻の「檻の中の理論」に対する夫の対応について詳しく描いているというべきである。その対応のもっとも注目すべきものは「透明」になるという心構えである。夫が妻の精神状態を「檻の中の理論」で概括しているということは、妻の「異常」さに対して彼が自分なりに気付いたことを示している。従って「透明」になるという夫の心構えは意識的に妻の「異常」さに対するものであると言える。「透明」という心構えによる夫の対応を具体的にみると、それは「正直」になることと現実を直視することである。ときには物事をズバリ言うことであり、ときには妻に現実の認識を迫ることである。たとえば「実際、俺はお前の傍に坐っているのは、それやいやだ。肺病と云うものは、決して幸福なものではないからだ。」「お前の敵は俺の仕事だ。しかし、お前の敵は、実は絶えずお前を助けているんだよ」といったようなものである。そして、作品には、夫がこういった心構えを理論化し、また妻に対してこういった心構えを持つことによって「自己観照」をしようとする

る作家の意図が見られる^⑪。

作品は、妻の「檻の中の理論」と夫の「透明になる」という心構えとのぶつかり合いを以て展開される。その具体的な形はつまり作品に見られる絶えない且つ激しい夫婦の言い合いである。一方、激しい言い合いの結果は決まって病状悪化である。妻はこのため「彼女の檻の中で製造する病的な理論の鋭利さのために、自身の肺の組織を日々加速度的に破壊していった。」夫もまた「こういう夜になると、妻の熱は定って九度近くまで昇りだした」ので、「一本の理論を鮮明にしたために、氷嚢の口を、開けたり閉めたり、夜通ししなければならなかった」。

こうして作品にはその対応の「理論化」と「自己観照」のために構えたポーズのようなものが見られると同時に、病状の悪化がいかにも繰り返されているかという生々しい風景も見られるのだ。

では、なぜ作品の夫婦はこういう日常を繰り返しているのか、それには次のような理由があると思う。妻は、「檻の中の理論」に囚われている限り普通という正常の人のように振る舞うことが出来ないわけである。というのは、結核患者の精神状態はかなり特殊なものがあるからである。そういう特殊さが作品から見てもすでに分かるものだが、実際医学的な見解としてもそういうものが見られる。たとえば、精神病学者が次のように指摘している。

結核もまた、病意識のもちにくいものであった。しかも奇妙な疲れやすさと同時にふしぎな頭の冴えの訪れる病気であった。知的高揚と無力感が共存し、不眠と焦燥の夜々訪れる疾患であった。再発のない保証はなく（中略）周囲の人々は自分に奉仕する限りにおいて重要視され感謝すべき存在とされがちである。（中略）結核だけが他のほとんどあらゆる疾患と異なって分裂病親和的であるという、結核全盛時に確認された事実のことも秘密があるだろう。ともに焦慮に身を任せれば、それはほとんど確実に負の結果を生むのである。そして分裂病或いは結核ほど激しいあせりと深く結びついた病的状態はあまりないだろうと思われる^⑫。

結核のこれらの特徴の多くは作品の妻からも見られるものである。が、これに対して夫が同調できなかった。理由の一つは、当時結核患者の精神状態などの特徴がまだ解明されていないため結核患者にどう対処すればいいかわからないという所にあると考えられる。もう一つの理由は、夫には「自分に向かって次ぎ次ぎに来る苦痛の波を避けようと思ったことはまだなかった」という物事に対処する従来の姿勢があることである。夫は、妻の「檻の中の理論」に対してなぜそうなるかわかる由がないが、それに対応して行かねばならないという現実的な立場に置かれているので、自然に「従来の姿勢」にすがって行くしかないわけである。しかし、この「従来の姿勢」は必ずしも当を得たものとは言えない。「彼と妻とは、もう萎れた一對の茎のように、日日黙って並んでいた。」というように結果的に妻の病状の悪化をもたらすだけではなく、看病の夫も消耗されてしまう。

ただ、作品を見れば、妻の精神状態は「異常」な時が多いが「正常」のときもあることが分かる。たとえば、「あたし、こんなに我ままを云ったのも、あたしが云うんじゃないわ、病気が云わすんだから」という言葉は冷静さと理性を示すものである。こういうときに夫婦の間にある種の穏やかさが取り戻されることがある。

作品には、このように結核患者がいる日常が描かれている。その日常は結核患者の妻がいるため、穏やかな日もあるが、神経がすり減っていく日が多い。この意味でその日常は結核的な日常と言える。一方、作家は、作中の夫を中心にして描くことによって病人だけではなく、健康な夫にまで結核的な日常を持たせてしまう。そして、作中の夫婦はこういった結核的な日常のなかで消耗されていく。

『花園の思想』という作品は、『春は馬車に乗って』の続編と考えられるものである。というのは、結核のため家で静養する妻の病状が悪化したり小康になったりする『春は馬車に乗って』に対してこの作品は、妻が療養院入院中ばかりでなく、死が眼前に迫っているという設定となっているからである。「檻

の中の理論」といったような精神状態があまり見られない代わりに、妻は結核的な生に諦めきって死を待っただけだという精神状態におかれていて死への余裕さえ見せている。夫は今までの看病で疲れ切った体を引きずって療養院の中と周辺を毎日うろろしている。療養院だから、彼は看病から解放されているわけである。彼に残されたことは、妻の死を見守ることと、妻に気休めなことを言うことと花で病室を飾る位のことである。『春は馬車に乗って』に見られる「透明」になるという心構えはすでに必要としない。

そのうえ作品は、こういった夫に死ぬ寸前の妻のさまざまな表情を美化して捕らえさせ、また花に囲まれた療養院と、それを囲む周辺の漁村との関係を考えさせる。さらに夫をして妻の苦しみを引き延ばす「花園」と、実際妻を苦しみから解放し早く安息させる「漁村」を発見することに至らせ、初めて漁村に好意を感じさせる。妻の死が確実且つ間近なものになるとき、夫はこの「花園」の対蹠に置かれた、健康の人々の生活の場とされている「漁村」に好意を持つようになる。これは夫の現実傾倒を表すものであると言えよう。

『花園の思想』では特に注目すべきなのは妻の死への超然とした態度である。たとえば、いよいよ死が訪れるときの描写は次のようである。

妻は頷くと目を大きく開いたまま部屋の中を見廻した。一羽の鴉が、彼と母との啜り泣く声に交えて花園の上で啼き始めた。すると、彼の妻は、親しげな愛撫の微笑を洩らしながら呟いた。

「まァ気の早い、鴉ね、もう啼いて。」

彼は、妻の、その天晴れ美事な心境に、呆然として了った。

鴉に対する妻の「親しげな愛撫の微笑」と呟きは死に対する余裕を表すもので、死への超然とした態度である。この死に対する態度は決して妻の生まれつきのものではない。また精神修養や信仰によるものでもない。これは「これ以上苦しむのは、いや」、「あたし、ただ、もうちょっと、此の苦しさが少なければ、生きていてもいいんだけど」というように、回復の見込みが無いまま生への希望と生の苦しみの耐え難さの間に焦りだけが繰り返されている長い結核的

な「生」を経て到達したものであるというべきである。

三 『蛾はどこにでもいる』と『計算した女』——亡妻想いの内外——

『春は馬車に乗って』と『花園の思想』の間に書かれた『蛾はどこにでもいる』と『計算した女』には結核を病む妻が登場せず亡妻が触れられただけである。そのかわりに結核患者の女性が登場している。そして前者の男は妻と自分の間に「蛾」を介在させて亡妻想いを内心の活動とするのに対して、後者の男は第三者の女に向かって亡妻への思い出をしきりに語る。

『蛾はどこにでもいる』という作品では、男は義妹の「青白」い身体（亡妻のイメージと重なる要素を持つ身体）を避けようとして出かけて行くが、彼の行く先々蛾が現れる。そのうち彼は蛾が妻だという妄想に陥る。妄想からなかなか抜けられないとき、結核の女性が彼に会いに来る。結核患者の女性を見ると、彼は直ぐ亡妻と瓜二つだと感じるが、彼をつきまとうように現れる蛾が女性に向かってぶつかっていく。そのために女性が逃げて二度と現れてこない。彼は、蛾も結核を病む女性も妻ではないと悟り次第に正常に戻る。

作品は、亡妻への思い出に悩まされる男がその幻想から次第に「蛾はどこにでもいる」という現実的な認識へ復帰する過程を描いたものである。だが、「青白い」身体からの逃避、そして亡妻を思われる蛾を男が求めるのではなく男を蛾が追っかけてくるようにまた待ち伏せているように書かれていることからいえば、男は自ら亡妻の思い出を内心で暖めるのではなく、内心にある亡妻の陰影から抜け出そうとしているというべきである。ただこれを『花園の思想』と関連して考えると、『蛾はどこにでもいる』に一応亡妻の陰影から抜け出したと書かれているのに、作者は『花園の思想』を以て、再び妻の死に対する夫の体験を暖め、妻の死顔、死に望む妻の超然とした態度を美化して妻を見送る。時間的にはこれは逆である。そして両作品にはともに現実復帰という志向が見られる。なぜ二度も現実復帰をはかろうとしたのか。現実復帰の根拠を見ると、前者の男は、「とにかく、俺は腹が空いて仕方がない。これだけは事実だ」と

いう本能的な現象に頼った現実復帰をはかろうとしているのに対して、後者の夫は、現実の生活を営む場としての「漁村」の発見によって社会的な意義での現実復帰を計ろうとしている。ここに『花園の思想』の書かれる理由の一つがあるのではないかとと思われる。というのは、本能的な根拠による現実復帰の効果に対して横光利一自身も疑問を持たずに入られないからである。

『計算した女』では、結核がかなり重いお桂という女性は愛慕のため男の所に来る。男は、彼女の看病をしながら亡妻への思い出を語ることによってお桂の愛を拒み続ける。一方、お桂は、男が自分の看病をしてくれるし、自分の愛を明確に断っていないため期待しながら愛を求め続ける。彼らは愛などについて常に言い合いし互いに相手を言い負かそうとする。この争いの中で、男は幸福感を覚えるが、お桂は回復しつつある。しかし、秋が来ると男はこれ以上お桂と一緒にいることが我慢できなくなって旅に出かけたいと言い出す。これはお桂にとって愛してないという宣告のようなものである。彼女は「私は昨夜の雨と風とのために、また熱を出しました。あなたに頂いた私の健康は、お返しします」という書き置きを残して再び悪化した体を引きずって出ていく。

『計算した女』では、男は最後まで結核を病む女性の愛を拒んだが看病はした。これもいわば「冷たい献身」といった性質の看病である。だが、言い争いの中結核を病む女性は回復している。これはまさに『春は馬車に乗って』の、夫婦の言い争いによって妻の結核が悪化していくということに対する「打ち消し」のように見られる。男と女の言い合いは、『春は馬車に乗って』の結核的な日常の具体形としての夫婦の言い合いを思い出させてくれるものである。ただ両作品に次のような違いが見られる。その一つは人物の関係である。『計算した女』の男女は『春は馬車に乗って』のように夫婦ではない。そして、『計算した女』の男は亡妻の思い出を以て愛を拒み続けている。つまり患者と看病者の間に愛が一方通行のようなもので、実ったものではない。そのため、男の看病は夫または恋人としての責任が含まれるものではない。また看病の具体的

な様子、生活費稼ぎと看病を兼ねる「夫」のような苦勞が見られないという点からいっても、『計算した女』の看病と『春は馬車に乗って』のとは異質なものであると言える。従って、作品はあたかも同じ言い合いという日常でも、ほかの条件と環境が違えば結核患者は回復するものだと説いているように感じられる。

一方、男はかねてから女から離れようとしているが、二人の言い合いの中で幸福を覚え、女もそのお陰でエネルギーを得たかのように回復しているので、そのままいつづけてしまう。このままで行けばハッピーエンドへ向かっても不思議ではないが、しかし、秋風が吹くと男はこれ以上女と一緒にいつづけることに我慢できなくなる。それはなぜであろう。一つ考えられることは、たとえ結核を病む女性の一時回復があっても本当に無事に冬を乗り越えるかという男には全く自信がなかったことである。それより、結核で妻を亡くした男には結核に罹った以上いずれ死んでいくことを身を以て知っているので、ハッピーエンドは彼には考えられないことであるというべきであろう。従ってこの作品は『春は馬車に乗って』に対する「打ち消し」だけではなく、作品自体に一つの屈折が含まれているといえる。

『計算した女』のヒロインには実在のモデルがいる¹³というので、これも横光利一の実体験を作品化したものと言える。では、横光利一はなぜ、男女の関係、環境、心情などこそ違うが言い合いの中で結核を病む女性が回復すると言うことを描いておいてそして最後になると作中の男に女の健康を壊すかのように看病の継続を拒否させたことを描いただろう。

『書翰』に「折角正木先生によくして頂いた病人を悪くしてしまいました、申訳ありません」（大正15年6月3日宮田重雄宛）とあることと、『春は馬車に乗って』では、夫が主体性保持のため妻の特殊な精神状態に同調しなかった「心構え」を以て看病をするなか妻の病状の悪化が繰り返されていることとを合わせて考えれば、その「心の構え」の正当性に疑いを持たずに入られないし、また、もしその「心の構え」のため現実の妻の病状が悪化したのなら、横光利

一は妻に対して負い目を感じずにいられないはずである。この意味で言えば、結核患者の回復を説くことはその負い目から抜け出す試みのようなものであると言えるが、結核患者の完全なる回復は現実的にはほぼ不可能だし、結核でなくなった妻の死を経験した横光利一もそう信じているはずなので、この試みは失敗に終わるしかないのだ。そして、『蛾はどこにでもいる』の亡妻の陰影に対する払拭、『花園の思想』の、夫は例の心構えを見せずに妻の死を美化すると同時に妻に気休めなことを言うようになることもどこかこの負い目と関わりがあるように思われる。

四 『妻』と『美しい家』——花のある結核的空間の明暗——

この二つの作品は、背景がともに花の多い家で、また病妻が登場しているが、結核という言葉が見られないというところに共通点が見られる。だが、前者には「長らく病んで寝ていた。」と「笑ったまま急に咳き出した」などの言葉が見られ、後者には「私の誇っていた門から登る花の小路は、氷を買いに走る道となった。」「空気が悪い」、「妻の体は絶対に動かすことが出来なかった。」さらに妻が百合の花の香りのために激しい咳をするということが見られるので、ともに妻の病気が結核だと示唆していると思う。

妻が登場し且つ結核に罹ったことを示唆した点からいえば、『妻』は結核患者の妻に触れた第一作だと言える。作品では、夫は、風と雨のために小路の両側に倒れた花を踏まないように歩くと足を浮かせて滑って花の上に仰向きになって倒れてしまう。寝付いた妻はそれを見て、最初は顔が青くなり、継いでは平気になり、さらには哄笑する。夫は妻のこういった違った反応を夫婦生活の三つの段階だと考える。妻は長らく病气しているが、「体を振って笑」ったり、また突然子供が欲しいと言ったりする。夫が庭の葡萄をとってあげると妻は美味しく食べる。そして夫は庭の薔薇の葉に雌のカマキリが雄のカマキリを食い尽くす一幕を目撃する。夫は、それを夫婦生活の第四段階だと考え、雌に食われている雄の表情から「悠長な歓喜」を感じる。

作品は、結核を病む妻のことが書かれてはいるが、全体的に明るい雰囲気
が漂い、夫婦の睦まじさと愛に満ちるようなものである。ただ、雌のカマキリが
雄を喰う一幕は、たとえ作中の夫に雄の「悠長な歓喜」といった表情が見える
にしても、やはり明るい風景の中にある陰影のように感じられる。身ごもる雌
が栄養摂取のために雄を食べてしまうことはカマキリの習性であるという。雄
のカマキリにとって雌に食べられることは自分たちの子供のためであり、また
夫としての責務でもある。作中の夫が雄から「歓喜」の表情をみたのは多分こ
ういったカマキリの習性とその意義を知った上での感触だと思われる。それ
でもこれは、自然界の残酷性を感じさせ何か悪い予感を感じさせるようなもの
であり、また夫婦のあり方に対する夫の潜在的な不安を示唆するものである。そ
して結核の存在が示唆されている以上、その不安には不治の病結核から来るも
あると考えられよう。

『美しい家』という作品には、病妻が登場しているが、病気の様子などは余
り具体的に描かれていない。夫婦二人で家探しをするが、途中で疲れてしまう。
ひと休みしていると、今日中家を探さなければならないと思って再び家探しを
はじめるが、しかし疲労のため早く家を見つけて楽にしたいという心理が働い
た結果家探しには細かくチェックする余裕がなくなる。彼らはある美しい家を
発見して家の長所を見てその場で決めてしまう。だが、暫く経って「嫌だ」と
思うようになる。美しい家には「暗さ」があるからだ。「暗さ」のお陰で、庭
の風景が冬になって行くに連れて不祥事が起こる。「私」の風邪が長引きする
ばかりではなく、母親が「アッ」と言ったまま死にそして妻が寝込んでしまう。

この作品は創作時間から言えば『妻』の後だが、内容的には『妻』の前のこ
とが描かれている。そして『妻』には食べられている雄のカマキリから「悠長
な歓喜」を見るといった余裕があるが、『美しい家』では、結核の原因を家の
壁に求めようとしている。結核を病む妻がいて花に囲まれるという意味で共通
した「家」にいても夫の心情は一方は明るく一方は暗転している。

『美しい家』の夫は、家の「北に連なった一連の暗い壁」を妻が結核に罹らせた張本人と見ている。当時に、なぜ結核に罹るか、医学的にいろいろな説があっても、明確なものはおお確立されていない。夫のこの見方は結核の病因に対する作家横光利一なりの手探りと言えるが、一方、家の壁のせいで友人の子供が死んだことを除いて、『美しい家』に書かれたことは「家と壁」^④という随筆のとはほぼ同じである。小説は「家と壁」という随筆の材料を一寸構成して書き換えたものに過ぎない。「家と壁」には「北に連なった壁が絶えず私の心を圧迫した。」「変に心の眼前に絶えず突き立っているような壁は呼吸器病を連れてくる」と書かれている。注目すべきなのは、作者は二回も「心」という言葉を使っていることである。それによって、壁（環境）——心（精神心理）——呼吸器病（結核）という因果関係が示されている。同時に、環境による精神抑圧は結核病を誘発する要因だと横光利一が考えていることをも意味する。だが『美しい家』では、環境による結核の病因説よりも、夫にすべてが彼らの知らない内に起こったというふうに思わせるところに結核が一つの悪運の象徴とされていることが注目すべきである。たとえば、家を探す途中に「私と妻と同じように疲れたということが、私たち一家の間に、大きな悲劇をもたらした原因であった。」「ぼんやりとしたゆるんだ心理の続いている空虚な時間に、黙々として私たちの運命を動かしている何者かがあった。」とある。悲劇とは、夫の風邪の長引きと母親の死はその一つだが、何よりも妻が結核に罹ったことである。そして、環境が悲劇の原因である以前、その環境に遭遇させる運命というものがあつたのだ。

『妻』と『美しい家』との二つ作品を比較してみると同じ花に囲まれた家を舞台にするものとして、『妻』の花は結核患者がいても夫婦愛に満ちるような空間を飾っているが、『美しい家』の花は病人の解熱用の氷を買うために走る空間を飾っている。これは大変対照的になっている。そして、随筆には、壁の影響で妻が結核に罹ったという見方が示されているが、作品には結核に対する運命論者的な思考が見られる。

五 結核：心的歷程と試行錯誤——作品位置づけの試み——

以上、結核を病む妻か女性が登場する作品を見てきたが、明らかに、作家は結核を病む女性より、男を中心にしている。従って、結核を病む女性のイメージがそれほどはっきりと浮かんでこない。時には、結核という病気を示唆しているが、直接は結核はどうだということには多く触れてない。結核そのものが正面に出てくることは案外少ない。従ってこれらの作品は、結核の女性を描いているよりも結核の女性と一緒にいる男の心境をおもに描いているというべきである。さらにはほぼ作家の実体験を髣髴させるこれらの作品では、作家は常に作中の男に主体性を持たせている。こういうところから、作家は結核の女性を書くよりも、結核に対する自己存在の根拠と主体性の獲得を優先にしていることが分かる。こういう意味で、これらの作品は結核に触れてはいるが、結核のロマン化や結核を病む作家の心境談などの結核文学とは異質的なものと言える。

一方、男の主体性保持は、結核を病む女性との日常の中で、あるいは死に向かう結核患者の超然とした態度の前で行われている。前述したように、結核を病む女性の精神状態とその死への態度は大変特殊なものである。そのうえ、妻の理論を「檻の中の理論」と夫が決めていることは、夫が「檻の外」にいることを意味し、結核を病む女性の心理状態に深く立ち入らないことを意味するものであり、また夫の従来姿勢と関連するものである。「檻の中の理論」によって示された妻の精神状態の異常さに気付いていても、それに対する理解への努力は夫から余り見られない。あくまでも自分が「苦痛を舐める」という立場から主体性を保とうとしている。結核を病む女性の中に立ち入らないでただ目の前の「形」に対して主体性保持をしようとしている。それは本当に出来るものだろうかという疑問がどうしても残る。だがこれは結核の秘密の全貌が解明されたいまに持ち得る疑問である。当時の状況下におかれ、結核に多くの戸惑いを感じた横光利一にとってむしろ懸命な構えだったと思われる。そして、

結核の特殊性に気付きながらもあえて妻に同調しようとしないうということから考えれば主体性の保持にはかなりの強引さが感じられる。これは、横光利一にとって、妻に同調するよりも結核的な日常によってもたらされた苦痛と不安を克服することは優先であることを意味するし、また苦痛と不安がそれなりに強かったことを物語っていると思う。

一方、『妻』、『春は馬車に乗って』そして『花園の思想』という三つの作品は一つのプロセスを形成している。それは「結核」に対して不安を抱きながらの余裕から、結核による心身両面の消耗を経て、結核的日常が残された陰影からの脱出とそれによる現実復帰に至るといったプロセスである。

具体的に言うと、『妻』では、夫婦愛が見られ、たとえ夫婦の第四段階になっても、夫はなお「歓喜」を覚える余裕があったのだ。『春は馬車に乗って』では、まさに夫婦の第四段階になっていて、夫は妻に「食べられている」ありさまである。しかし、夫はすでに「歓喜」を覚える余裕がないどころか、「この女は助からないだろう」とばかり考えるようになる。「妻」ではなく「この女」という呼び方は夫と妻との距離を示すものである。夫の看病も愛によるものではなくある種の「冷たい献身」的なものになっていることを物語っている。作品の中に夫にとってせめての「歓喜」的なものがあると言えば、「此の苦痛の頂天に於てさえ、妻の健康な時に彼女から与えられた自分の嫉妬の苦しみよりも、寧ろ数段の柔らかさがあると思った。してみると彼は、妻の健康な肉体よりも此の腐った肺臓を持ち出した彼女の病体の方が、自分にとってはより幸福を与えられていると云うことに気がついた。」といったものである。しかし、これも夫にしてみれば、一つの構えに過ぎないのだ。次第に食べられてしまう現実は何の変わりもない。結核的日常が依然として続いている。そして、妻は最後のエネルギーを消耗しきって、「生死の間を転っている一疋の怪物」になり、夫は「感情の擦り切れた一個の機械」となる。これは『花園の思想』の現実である。ここにおいて横光利一は丹念に死に臨む妻の心情と姿を描き、

極力美化する事によって、妻の死を見送っている。それと同時に、精神的に現実復帰のための準備を整えようとしている。こうしてこれらの作品は、妻が発病してから死ぬまでの横光利一の心理的プロセスを形成している。なお、この心理的プロセスは、如何に結核的日常の中で最初は余裕を持ち、それからそれを失い、さらにはそこからの脱出をはかるといった作家横光利一の心的歩みを記録するという意味で、これらの作品は結核に対する横光利一の「心的歷程」と位置づけすることが出来ると思う。

さらに前述したように、『蛾はどこにでもいる』の本能的な根拠による現実復帰の効果に対して疑問を持っているため横光利一は美化などを以て妻の死を確認し社会的な根拠から現実復帰をはかろうとすることと、『花園の思想』以後結核を病む妻を素材にとった作品が見られないことを考えれば、横光利一は『花園の思想』をもって結核の妻との関わりについて一つの区切りを付けようとするということが考えられると思う。そして、『蛾はどこにでもいる』をも含めて『計算した女』と『美しい家』をそのまま心的歷程に帰することは難しいようだ。ただ『妻』の「暗」に対する『美しい家』の「明」、『春は馬車に乗って』に対する『計算した女』の「打ち消し」と「屈折」そして『花園の思想』に対する『蛾はどこにでもいる』の疑問的な現実復帰といった作品の相互関係を考えると、これらの作品はそれぞれ心的歷程を示す作品に対する屈折として考えられ、また横光利一にとって『花園の思想』に到達するまでの屈折でありながら戸惑いの塊である結核を究めるための試行錯誤であると言えよう。無論、本能的な根拠による亡妻の陰影からの脱出は内的なもので、冷たい献身の看病による結核の回復、そして環境による結核の発病原因説は外的なものであるという意味でそれぞれ違うものである。

結論に代えて

横光利一の病妻物を結核の視点から述べてきたが、これを以ていえば横光利一にとって根本的な問題は結核そのものの実態よりも、心のなかに潜んでいる

個人の存在をあやふやさせる不安である。問題の不安だが、君子の人柄から来るものと横光利一の「姦通と類似の心的経験」から来るもののほか、生きていて死の運命にある、そのために精神上の何らかの異常が来している結核患者のいる日常も大きく関わっているといわなければならない。不安をそのまま不安として描き出すこともできるが、横光利一は彼なりの論理を立てて不安の克服に取り組んでいる。そして、結核は近代において代表的な病いである。特に近代化された都市において患者の大幅増加によって結核が大きな社会問題にまでなったのだ。この病によってもたらされた不安を個人存在の危うさと結びつけようとするところに作家横光利一の近代性を見ることが出来ると思う。直接ではないが、強いて言うくと近代人の不安を意味する結核のメタファーは横光利一のこれらの作品から見る事が出来るようだ。

なお、今までの研究では、よく結核を病む妻の美化という指摘が見られるが、それはどういった美化なのか、結核的なものはどういうものなのかについて余り具体的に論じられていない。このほか、横光利一には結核に触れる作品は外に『園』、『朦朧とした風』、『担ぎ屋』などがある。これらの作品は妻とは余り関係がない。『園』は病妻もの前に書かれたもので、結核の男性患者である主人公の、結核の遺伝への呪い、結核のため禁じられた愛、そしてやや絶望的且つ異常の行為を描いたものである。これは、結核と愛についての横光利一の思考は妻が死ぬ前にすでにあったことを物語っている。そして『朦朧とした風』は都会生活を背景に結核と愛との問題が触れられているものである。さらに、『担ぎ屋』では、結核が「運命論」と結び付けられている。これは病妻物と別に考える必要がある。これらのテーマをこれからの課題にしたい。

注

- ①テキストは『横光利一全集』（第2巻 河出書房新社版 昭和56年8月）による。
- ②『横光利一論』栗坪良樹著 永田書房版 平成2年2月
- ③同②
- ④『横光利一論——飢餓者の文学』山崎国紀 北洋社1979年
- ⑤『精神科治療の覚え書き』中井久夫著 日本評論社 1982年

- ⑥『横光利一評伝と研究』井上謙 おうふう 平成6年11月
- ⑦『横光利一全集』第16巻 河出書房新社 昭和62年12月
- ⑧『結核の文化史』福田眞人 名古屋大学出版社 1995年
- ⑨『結核患者の心理』モーリス・ポロー著 丸善 昭和32年1月
- ⑩同⑥
- ⑪同②
- ⑫同⑤
- ⑬『横光利一伝の一空白——あるプラトニック・ラブ』由良君美（解釈と教材の研究『国文学——横光利一 疾走するモダン』平成2年11月号）
- ⑭『横光利一全集』第13巻 河出書房新社 昭和57年7月

討議要旨

平岡敏夫氏から、今までの研究への目配りの重要性が指摘され、二、三の研究の名をあげて、助言がなされた。また清田文武氏は、肺結核による死亡が東京都で最も多かったのは、明治43年で、それから地方へ移行していくと助言された。発表者は横光利一の結核の特異性を強調して、これらに答えられた。